

文豪 丹羽文雄の作品と人生からみる老いと認知症の実相 ～「厭がらせの年齢」から百歳までの道程～

橋本 正明 ((社福) 至誠学舎立川理事長 / 立教大学兼任講師)

はじめに

文化勲章の受章(1977)者丹羽文雄(1904～2005)は、日本文芸家協会会長を長く勤め、戦後・昭和年代の文壇の大御所的な存在であり、正に文豪といわれる作家であった。また1953年には美術・文芸家のための国民健康保険を創設することに力を注ぎ、芸術家の生活と健康の安定を実現するなどの大きな働きをしている。また後進の育成にも大きな役割を果たし、門下生から瀬戸内寂聴や吉村昭、津村節子、河野多恵子などが巣立っている。

彼は百歳を超えた小説家として記憶をされているが、晩年の約20年間は認知症に罹り、介護保険の利用をしてその生を終えた。また介護者の長女本田桂子は、その介護の体験を執筆し「父・丹羽文雄 介護の日々」として出版したが、介護保険の利用が始まってあけなく2001年65歳で急逝してしまう。料理研究者としての仕事を続けながらの「朗らか介護」は20年近く続き、その間、ストレスが彼女をアルコール依存症にしみ、入院生活も経験させたいうでのことであった。「朗らかな介護」とは父親の弟子であり、明るく楽しそうに介護体験を話す本田桂子に感服し、その体験を出版することを勧めた瀬戸内寂聴の言葉であった。

丹羽の百年の人間の歴史を通観してみると、文学者としての評価と同時にそのテーマの人間らしさと実人生にある種の感慨を持つのも事実である。本論ではそこから認知症に焦点を当て、小説家が描きたかった人間の本質と、同時に認知障害の持つ厳しい生活障害の捉え方について考えてみたい。

I 文豪「丹羽文雄」とは

丹羽は戦前から小説の執筆活動を始め、戦後は銀座のクラブなどを舞台とした風俗小説で流行作家となり、小説家として社会的な成功を収めた。中年までは私小説的な作品が多いが、その後は男女関係の機微をテーマにした恋愛小説を多く

発表し、人気を得た。その後は自分自身の宗教観を見つめ、思索を深め、宗教者としての「親鸞」や「蓮如」を描いた作品に取り組み、大成し一家を成した。

彼の人生観や作品のテーマにはその生い立ちが大きく影を落としている。浄土真宗の住職だった父は、婿養子であったが、母は本人が4歳のときに旅役者の後を追って家を出ている。母の出奔の遠因は父と義母、すなわち妻の母との男女関係が結ばれていたことであった。

幼児であった彼には母に捨てられた経験と母への思慕があったと想像できる。そして人生（生）の大きな要素である人間の業として、「情一性愛」を受け止める心情が、小説作品において人間観や女性観、家族観として克明に描かれているのである。

戦前、一時は実家での僧侶の経験も持ったが、小説家として丹羽が文壇から評価をされるきっかけとなった小説「鮎」や「菩提樹」はこの母をテーマにした私小説である。そこでは家族の恥とも思えるその体験を赤裸々に、そして非情に描き文学として昇華させている。正に正統派私小説家の真骨頂の作品なのであると。戦後丹羽は、地方で大店の旦那の愛人として生活をしていて自分勝手な母親が、老いて認知症となり介護が必要になったときに彼女を引き取り、最後の世話をするのである。もちろん直接介護をしたわけではないが、その心中は複雑なものがあったと思われる。

また、彼自身まだ小説家として無名時代に銀座のホステスをしながら経済的にも支えてくれた最初の妻とは、彼女の過去における男女関係の乱れから関係が破たんしたが、そこにも生母の生き様に対する丹羽の心情が見て取れる。

その後彼は再婚の相手として、極めて平凡に作家の妻として理想的な女性、綾子を選んだ。彼女は家政をすべて取り仕切り、料理上手で、多くある来訪者への接待、また丹羽家の会計を握るしっかり者の妻であった。また彼女は極めて才能豊かで、後年自らの家庭の機微を題材とした著書をものにする程の才女であった。（『丹羽家のおもてなし家庭料理～娘に伝える手作りの味～』1978／『夫婦の年季』1985）

日頃はよき小説家の妻として仕え、また子どもの教育にも厳しい母であった。そして同時に心の中では主人としての丹羽文雄の全て、また家庭の全ても自分の支配下に置かなければ納得しないほどの自意識の強く勝気な性格をも持っていた女性であった。

人生に対しての深い思索と、人間の生に対しての謙虚な洞察を持った夫と、極

めて自意識が強く、自己中心的な性格を持った妻の夫婦が老い、そして両者とも認知障害を持つ事となった時、その夫婦関係は極めて覚めたものになる。そして特に家族の介護者に大きな負担を強いることとなる。大らかな性格であった丹羽文雄の心身の衰えとアルツハイマー型認知症の発症、一方依怙地で自己中心的な性格が一層強く周囲を悩ませる脳血管性認知症でまだらな認知障害が出てきた妻。その後この夫婦の長女であり介護者である本田桂子は修羅の日々に直面することになるのである。

Ⅱ 小説「厭がらせの年齢」を中心として

「厭がらせの年齢」は丹羽43歳、昭和22年の作品である。この小説も彼の初期の小説の系統を引き継ぎ、自らの体験を下地とした私小説として位置づけられる作品である。

すなわち「厭がらせの年齢」である妻の祖母うめ女、86歳を疎開先の不便な仮住まいに引き取り、彼女の我儘いっばいにエゴイズムをむき出しにした悩ましい生活を、シニカルなブラックユーモアとも取れる描写で描いているのである。もちろん、実際の生活の上でうめ女がどのような行為をしていたかは分からないが、戦後すぐの食糧難、住宅難の中での同居である。一般的に同居が常体である時代ではあるが、世代が離れた孫の家庭なのである。同居しているうめ女の執拗な嫌がらせの行為、意地の悪さに嫌悪感すら感じさせる。

人に嫌われる老いの見苦しさをあからさまに、また毒々しく86歳の老醜の輩としてうめ女を描いている。それは多くの読者がうめ女の境遇へのいたわりや同情を持つ事が難しいほど、ある種の悪意を感じさせる描き方である。

うめ女は本人63歳の時に41歳の一人娘を無くしている。娘には3人の子供、すなわちうめ女から見れば孫娘である結婚した2人の孫の家庭間を行ったり来たりさせられているのがうめ女の生活なのである。しかしこの家庭でも彼女が厄介者であることは容易に想像できるが、そればかりではなく彼女は聞き分けなく「厭がらせ」を重ねる老女なのである。

作品の最後の場面である。「たまたま荷物の中から出てきた、20数年前に亡くなった娘の写真をみてうめ女は嗚咽をする。そこには涙はなかったが、分かれてからの己の人生を訴える姿に主人公はうめ女の人間らしさを感じた。憐憫の情に胸を打たれそのまま一人にしておいたが、あまりに静けさに部屋に戻ってみると、うめ女は写真を脇にのけて、せっせと持ってきたひ孫のパンツのゴム紐を引き抜いていた」

この結末から作者の意図をどう読み取るかは読者に任されている。作者、丹羽文雄の執筆意図が何処にあったのであろうか。不本意に同居させられた老耄の老女、そこには現代に向かうなかでの人の老い方、生きる場、そして家族のあり方を象徴的に提示している。

そこに丹羽文雄が自分自身の老いを見ているのではない、一步引いた高みから老いの難しさ、厳しさ、寂しさ、しかし醜くもしたたかに生きる人間の本性を描こうとしたのではないか。

今この小説の老いの描写を通して2つの事が理解できる。それは本来人間の持つエゴイズム、自己中心的な性向を抑えている理性という籬（たが）を、老いが外してしまうと、本人の人間性（人柄・性向）がストレートに表出されてしまうという事である。だから人間はどう生きるか、人間性を涵養していくのか、ということを問いかける教養小説である。もう1点は、不潔行為、作話、異常な食欲、不始末をトボケたり、意味不明な行為等これは認知症の周辺症状（BPSD）として理解できるところである。いくつものエピソードは、その意味ではこの小説が認知症のケアを中心的に捉えた、わが国でも先鞭をつけた社会派小説だという事が出来る。

作品の中で丹羽と見做される主人公とその妻の会話が興味深い。「アメリカでは老人は自分の老後自分で決めてしまう習慣があるらしい」「わが国ではなぜ、老人ホームの必要性を痛切に感じながら、近代的で衛生的で明朗なアメリカ風の老人ホームの実現に乗り出さないのかね」「一つには日本の家族制度が間違っているのよ」「そうだ、日本人は離ればなれになったほうが却って人生が幸福に送れるという考え方を家族制度の中に持ち込まないのだよ」

これは昭和23年（1948）の民法改正前に書かれた小説だという事を考え合わせると、丹羽が家族制度に対して、いかに革新的な考え方を持っていたかが分かる。

また、現在から見れば信じられないが、昭和22年（1947）の平均余命は男性50.06歳、女性53.96歳である。因みに平成25年（2013）には男性80.21歳、女性86.61歳となり、現在の女性の平均余命は実にうめ女の年齢と重なるのである。

「厭がらせの年齢」、この小説から遅れる事25年、昭和47年（1972）、認知症をテーマとした大ベストセラー、「恍惚の人」が有吉佐和子によって出版された。またその間の家族のあり方や価値観が大きく変わるなかで、高齢者の気持ちをユーモア溢れるセンスで取り上げている長谷川町子による4コママンガがある。

「意地悪ばあさん」は昭和41年（1966）から昭和46年（1971）まで、週刊誌サンデー毎日に連載された。この作品は長谷川町子の変容する社会に取り残されていく高齢者の気持ちを代弁する、優れた社会風刺の作品である。

これらの戦後の高齢者を題材にした作品は、私たちに、家族の老いばかりではなく自分自身の老い方を問いかけてくれている今日的な意味を持っていることを訴えかけている。

Ⅲ 丹羽文雄とその妻綾子 2つの認知症の姿

40代早々、戦後すぐに老いと認知症をテーマにした作品を世に出した丹羽文雄は、満百歳まで生き、天寿を全うした（2006年没）。作品「厭がらせの年齢」は、自分の家庭での認知症の老人の世話体験を題材にし、老いの問題や家族間の扶養をめぐる葛藤、家族による世話、認知症の介護の困難さ、そして老いる人自身の人間性のあり方と生き様の大切さを描いている。老いと人間のエゴイズムが作品のテーマであるが、彼は必ずしも社会的な問題として老いをテーマにしたわけではない。しかしその作品のなかで、彼は家族介護の問題と新しい社会制度としての高齢者福祉サービスに期待を寄せている。核家族化していく現代における高齢者の生き方の模索であったと理解できる。

この作品の発表から40年後、人生の全ての場面で成功をしたといえる彼自身が、この作品で問いかけた、老いの生活と認知症、エゴイズム、そして家庭のあり方について現実と直面すると考えることは無かっただろう。

しかし現実には厳しい。彼がまだ多くの社会的な立場や役割、作家同士の人間関係の輪の中にいた1980年から1990年にかけてアルツハイマー型認知症を発症した。よくある例であるが、介護者はひたすら周囲からその障害を隠し、社会生活に齟齬が起らないように苦心惨憺をする。しかし周囲は認知障害に気が付かないが病は確実に進行していく。どこかで破綻が起るプロセスの上にいるのである。

主たる介護者となったのは長女の本田桂子である。彼女は夫の仕事の都合で海外での生活経験もあり、料理研究家としての仕事の顔も持っていた。そして自他共に許す大のファザー・コンプレクスでもあった。丹羽の文章には中学生だった頃の桂子について思い出を書いた、次のようなくだりがある。「お母さんがうらやましいわ。だってお父さんのような人と結婚したのだから」（1993年・夜のおどろき）。

同時に娘時代の桂子は母親の綾子とは非常に仲の良い母と娘でもあった。桂子

の著書には結婚するまではよくおしゃべりをする親友のような母娘であったと書いている（『父・丹羽文雄介護の日々』1999）。

桂子は、アルツハイマーに侵された丹羽が日本芸術院の役職を始め各種文学賞の選考委員など、社会的役割から徐々に引退するように配慮をしていった。

その頃同時に78歳になった母綾子の老いも平行して進行して行った。何回かの入退院を繰り返し、確実に衰え、パーキンソン病を併発し、認知障害の症状も現れだした。とくに主人の認知症を認めない綾子は、桂子が進めた丹羽の社会的役割からの引退を絶対に認めず母と娘の関係を悪化させていくことになった。綾子はいつまでも文豪丹羽文雄の完璧な妻という座にしがみついていたかったのである。

彼女には以前から動脈硬化があり、循環器系の発作で入院も経験していて再発でもあった。もともと激しやすいタイプであった綾子の著作には「一度丹羽にぶたれたことがある、自分は2度ぶち返した」とあるが、その激しさも認知障害が出るまでは心の内に密かにしまわれていた。

確実に2人の認知障害は進行し、桂子の奮闘がはじまった。その経緯は「地獄の始まり、修羅の日々」として著書に詳しい。彼女は2人の認知症の症状（BPSD）は明らかに違うことを疾病の違いと2人の性格の違いから桂子は説明をしている。

丹羽は典型的なアルツハイマー病で、着実にそして緩やかに症状が出来てきた。徘徊、妄想、鬱的な心情などがるが、「人の言うことを素直に聞くタイプだから、他人（介護者）に迷惑をかけることは無く、いたって平穏なボケ方でした」という。

桂子の著書にエポック的に取り上げられているエピソードとして、長時間机の前に座る丹羽の前に置かれた原稿用紙には「丹羽文雄、丹羽文雄…とだけ書かれていた。」（著書から）徐々に見失っていく自己を何とか繋ぎとめようとする文豪の姿が痛ましい。

その頃綾子は脳血栓で倒れた。正常なところもある脳血管性認知症（著者はまだらボケと書いている）で、介護者が言う「不満病」まで併発してしまうことになる。「身体は不自由でも頭はシャープで口も達者」な綾子は不満病を進行させていき、どんどん意固地になり行ってしまう。ついには桂子が丹羽家の財産を篡奪していると友人に訴え、その友人が紹介した弁護士からの訴状が届くようなことまで起こる。

ついに日常的な修羅の日々は介護者としての桂子の精神を蝕み、そのストレスからの逃避行為としてアルコールに頼り、アルコール依存症になってしまい入院

治療を受けるまでに深刻な状態になってしまう。

ここで私たちは「厭がらせの年齢」のうめ女を思い出す。綾子はうめ女のモデルではないが、実母の世話、またうめ女のモデルとなる妻の祖母うめ女との同居、丹羽家における認知症との闘いの萌芽は実に昭和22年の作品から始まっているのである。

その後も綾子は穏やかな認知症の夫を言葉でいじめ倒し、怒った夫が彼女の首を絞めるといった出来事まで起きてしまう。そのことが綾子に与えたショックは大きく、恐怖感を覚えた彼女は自分から有料老人ホームでの生活を選ぶことになる。

「感謝教の教祖様」と周囲から言われるほど穏やかにボケた祖父と、「不満病」を深め、周囲を傷つける祖母を見て、桂子の娘は「おじいちゃんはエンジェル、おばあちゃんはデビル」と言ったといったという。

丹羽文雄は2000年の介護保険のスタートに合わせ、公的介護サービスをそれまでの私的に対応していた介護に加えて利用することとなった。

桂子は排泄の世話（オムツ）が必要になったら施設を利用すると心に決めていた。有料老人ホーム、グループホーム等の利用を検討していたが、2001年4月、介護者の本田桂子は心臓の発作で急逝。享年65歳であった。当時彼女は夫とグループホームの開設などを相談していたという。

丹羽文雄はそれから4年後の2005年4月まで生き、満百歳で自宅にて逝去した。

IV 結びにかえて

「厭がらせの年齢」で老いの醜さを描き切った丹羽文雄が、現実生活において自が認知症になってしまい、晩年の20年、介護を受けて暮らすこととなった。本人はまさか自分が百歳まで生き、認知症になって介護を受けるとは思っていなかっただろう。

違ったタイプの人間性を持ち、違った様相の認知症となった妻は、「うめ女」が正に現代に再来したような老女となる。介護者にとっては小説そのままの葛藤であったろう。そのダブル介護については、娘本田桂子の著書に詳しい。桂子はそのストレスからアルコール依存症になり、入院治療も受けることになる。なんとも皮肉な、痛々しい丹羽文雄の大往生への道であった。

本田桂子の著書は、丹羽の弟子である瀬戸内寂聴に勧められて書いた介護体験の記録である。寂聴は桂子の楽しそうに語る彼女の介護体験を聞き、是非その体

験を世に出すことを勧めた。それは丹羽文雄が通常世間に出さないような親族、家族の姿を作品とし事に相通じる。娘の桂子もまた、普通は世間の目にさらしたくないような家族の醜聞的な事柄まで率直に活写している。

ここに私たちが、これらの作品を文学的ばかりにではなく、社会的な視点から評価とするところである。そこから人間の本性の現れ、そして現実の生活に対しての考え方、行動をする指針が学べるからなのである。

以下にその学びの主な項目を列挙しておきたい。

- ① 老いの受容
自分自身の老いを受容できないときに自分ばかりではなく周囲との混乱を引き起こす
- ② ケアテイカー（ケアラー）の支援
本田桂子が強く主張している。老いた人ばかりではなく家族、スタッフを含めて介護者を支援していくことの大切さ
- ③ 排泄機能
排泄機能の衰え、介護が在宅生活と施設ケア選択の分かれ目
- ④ 周囲の理解
関係作りの重要性は当然であるが、本田桂子は介護をしている母親の代理人から訴状を受け取る。お節介な他人は時に刃ともなる
- ⑤ 共依存の危機
共依存は親孝行の美談として語られることもあるが、結果として虐待につながり、介護者との共倒れや介護事件引き起こす危険につながることもある
- ⑥ 若いときからの柔軟な生活態度の心がけ
「エンジェル」になるか「デビル」になるかは本人の人生の積み重ねが決める
- ⑦ 居所は柔軟に考える
老いて生活をする場は様々に、介護を受けやすい最善の住まう場を選ぶ
- ⑧ 人生の覚悟
家族も含めて、他人の犠牲の上に自分の幸せはないということをだれでも肝に銘ずるべきなのである

参考図書：

- 1、「厭がらせの年齢」 丹羽文雄 1947年 改造（初出）新潮文庫1948
- 2、「父・丹羽文雄 介護の日々」 本田桂子 1999年 中公文庫
- 3、「父・丹羽文雄 老いの食卓」 本田桂子 2000年 主婦の友社
- 4、「娘から父 丹羽文雄に贈る朗らか介護」 本田桂子 2001 朝日新聞社